

第13話 西洋人の渡来

見慣れぬ船が大隈の種子島に漂着する。ポルトガル人から鉄砲が伝わる。

ポルトガル船の漂着

第105代 後奈良天皇の御代の西暦1543年8月25日、大隈国種子島の南端に近い西村に、1艘の見慣れない船が漂着した。

乗組員は100余人でしたが、その人相も、その服装も、かつて見たことのないものだった上に、言葉が一向に通じなかったので、忽ち村中の評判となった。村長が海岸に出てみると、幸い船中に1人の中国人がいたので、村長はこれと呼び出して、砂の上に漢字を書いて筆談を試みた。それによって、この船がポルトガルの商船で、中国貿易に従事していたが、今度、暹羅(タイ国)から広東に行こうとする途中で、図らずも暴風のために吹き流されて、ここに漂着したものであることがわかった。

そこで村長は、この地は船の停泊に不便であるが、島の西岸の北部にある赤尾木港は良港で、人の出入りも多い商業地であることを告げて立ち去らせたので、ポルトガル船は、その翌々27日に赤尾木に入港した。

実に、これが西洋人のわが国に渡来した始めです。

しかし一体、ポルトガル人が中国貿易に従事するようになったのはいつからで、どうした事情だったか、それについては少し遡ってその由来をお話する必要があります。

マルコ・ポーロの東方見聞録

皆さんは、中国の元の忽必烈に仕えていたイタリア人のマルコ・ポーロが、弘安の役に敗れて帰った元兵からわが国の事を伝え聞いて、イタリアに帰った後に、これを西洋に紹介したことをごぞんじでしょう(第三巻の第6話 元寇)。ポーロはその著した「東方見聞録」の中に、ジパング(訳注:日本、ジャパン)という名称でわが国の事を書きましたが、その記事の中に、「ジパングは大陸から去ること4,000マイルの東方の洋中に在る大きな島である。住民は色が白く、風采が美しく、自から政府を建てて国を治めている。この島には非常に金が多く、住民はほとんどその処置に窮しているほどである。国王の宮殿の如きは、純金を以てその屋根を葺き、床には厚さ2本指ほどの延べ板を敷きつめている。窓もまた純金でつくってある」という意味の言葉がありました。

喜望峰の発見

この記事を見たヨーロッパ人がどんなに驚いたかは容易に想像されるでしょう。彼等はどうにかしてジパングに渡って、一攫千金の夢を実現しようと考えた。折柄、西洋では航海の術が大いに開けて、しだいに航路を延長していた時でもあったので、彼等がその冒険心を東洋に向けたのも不思議ではありません。わけてもポルトガルとイスパニア(今のスペイン)との王室は、そのころ盛んに航海や探検を奨励し

第13話 西洋人の渡来

いたので、その保護の下に、ポルトガル人は大西洋を南に下って行って、アフリカの南端を東にまわって印度に行く航路の発見を志した。ついにわが後土御門天皇の文明18年（大田道灌が殺された年で、西暦1486年）にバーソロミュー・ディアスがアフリカの最南端に達して、その岬を喜望峰と呼んだ。

ところが、そのころ、すでに地球は平たいものではなくて、円いものだということが、すぐれた航海者の間には一般に信じられていたので、彼等の多くは、ジパングや中国に行くには、東に行くよりも西の方に行ったほうが捷徑だと言いました。

コロンブスの新世界の発見

アメリカの発見者として有名なクリストファー・コロンブス（Christopher Columbus）もまた、この西方の路の最も熱心な主張者として、喜望峰の発見から6年の後の、日本では後土御門天皇の御代の、西暦1492年（訳注：意欲にかられたコロンブス）に、西へ大西洋を横断して行って新大陸を発見したのも、もとは無尽蔵に金がころがっていると伝えられるジパング即ちわが日本に来ようとして航海に出た途中の偶然の出来事だったのです。

この時、彼が発見したのは今の西印度諸島（訳注：南北アメリカ大陸の間の諸島）の中の島だったので、ここは勿論アメリカの一部になるが、彼はそれをアジアの島だと信じていました。しかし、一向に金も銀もころがっていなかったのに、自分はすでに日本を通り越して印度に来たものだと考えて、さてこそ、そこをば西印度諸島と名づけて、その土人を赤色印度人（Red Indian）と呼んだのです。

コロンブスは、その後、第4回まで航海を重ねて、最後の時には南アメリカ大陸の本土に着いたのですが、ついにそれがヨーロッパとアジアとの間の大陸だとは気がつかずに、自分は中国への直通路を発見したのだと固く信じながら、西暦1508年に死んで行きました。コロンブスは、イタリアのジェノアの生まれですが、この航海については、もっぱらイスパニア王の妃イサベルの保護を受けたのでした。

東方の印度航路

一方ポルトガル人は、喜望峰を発見したのでますます勇気を増して、東方の航路を開こうとしていました。ついに西暦1497年—コロンブスの第1回航海から5年の後—の末に、バスコ・ダ・ガマが喜望峰をまわって印度洋に出て、その翌年の5月20日にインドの西岸のカリコに着いて、ここに初めて東方の印度航路が開かれました。それからというもの、ポルトガル人はしきりにインドに来航して、植民地を開いたり、あるいは貿易を営んだりしていた。

しかし、ついに後柏原天皇の永正7年、すなわちインド航路の発見から12年後で西暦1510年に、インド西岸のゴアを占領して、ここにポルトガルの総督府を置いた。そして翌西暦1511年には更に船を東に進めて、セイロン島及び馬來半島のマラッカを取り、西暦1517年には中国の広東に来て中国と貿易を始めました。

こうして、ポルトガル人は東洋の貿易を殆ど全く一手に握ってしまって、爾来、しばしば広東に来航しているうちに、西暦1543年に、たまたま暴風に漂わされて大隈の種子島に着いたのです。彼等が初めて

広東に来た時から実に26年の後のことです。

さて、赤尾木に入港したポルトガル船は、早速、漂着の次第を島の領主種子島時堯に届け出て、その指図を待つことになったが、この時、船の乗組員らは、これという用事も別に無かったままに、上陸して獵に出かけて、持っていた鉄砲で鳥を撃ちました。90cmばかりの棒の先から凄まじい音と共に煙が出たと思うと、空を飛んでいる鳥がぼたっと落ちる。はじめてこれを見た島の者共はどんなに驚いたことでしょう！早速、領主のところに行って、この趣を申し上げた。

鉄砲の伝来

時堯はすぐにポルトガル人を呼んで、その鉄砲を見せて貰った。勿論、今の小銃のような精巧なものではなくて、筒底の脇の小さな穴から火薬に火をつけて発射する火縄銃の一種だったでしょうが、とにかく、はじめて見た鉄砲のことですから、非常に珍しかったに相違ありません。それで、早速その発射の方法を習って、ついに2挺の鉄砲を2,000両で買い求めた上に、家来に弾薬の製法を学ばせた。実にこれが日本に鉄砲の伝わった始めです。

間もなく漂流船は立ち去ったが、一方で、鉄砲の評判はそれからそれへと世間に伝わって、これを欲しがる者が次第に出て来ました。

時堯は領内の鍛冶屋に命じて、これの模造を試みさせた。大体の形はよく似たものがすぐに出来たが、肝心の筒底をふさぐことがどうしても出来ない。これに全く当惑していると、翌天文十三年に再びポルトガルの商船が種子島にやって来た。幸い鉄砲鍛冶がそれに乗り込んでいたので、時堯は、その者について筒底をふさぐ方法を習わせた（訳注：ねじで栓を作っていた）。

こうして、種子島は最初に鉄砲が伝わった処でした上に、また最初に鉄砲を製造した処ともなりました。鉄砲を一般に種子島と呼んだのはそのためです。

鉄砲の利用

ところが、世はちょうど戦国時代の真最中で、誰もが優秀な武器を欲していた時だったので、忽ちこの鉄砲を戦争に利用する風が大いに起きた。そこで、泉州堺の津田監物という人が、急いで種子島に渡って、製銃法と製薬法を学んで堺に帰り、鍛冶の芝辻清右衛門に命じて盛んにこれをつくらせたので、やがて近畿地方にも大いにこれが行われるようになりました。

関東に伝わったのは更にまたその後のことで、種子島の商船が台風のために吹き流されて伊豆に漂着した時です。たまたま船中にいた松下五郎三郎という種子島の者が鉄砲を持っていて、それで巧みに鳥を射落としたのが、はしなくも土地の人々の好奇心を呼び起こして、ついにその用法を伝えるようになったのだということです。

戦術と築城法の変化

こうして、鉄砲が広く一般に使われると共に、先づ一変したのは戦術です。在来のように、互いに先づ名乗りをあげて相戦う一騎打ちは次第に衰えて、団体を組んで進退するように訓練されました。

第13話 西洋人の渡来

次には築城法が全く面目を改めた。これまでの城池は、なるべく険阻な、要害堅固な山地などを選んだのですが、今度は、むしろ展望の利く土地を選んで、濠をめぐらし、石垣を高くし、その上に堅固な塼を築いて、その城壁には、狭間という鉄砲を打ち出すための孔をところどころに明けた。その上、諸所に高い櫓を設けたり、或いは幾重もの天守閣を築いたりして、はるかに敵の情勢を見るのに便利にした。また、城内には大きな建物をつくって、いざといえ、いくらでも多くの兵士が一時に籠城することが出来るようにした。

要するに、鉄砲の伝来は一方で戦争をいよいよ烈しいものとすると共に、弱い豪族が強い豪族に併せられて亡びる機会を早めたともいえるでしょうし、又、久しく麻の如くに乱れていた天下を統一する機運を促進するに与る力があつたともいえるでしょう。

さて、ポルトガル人はその後、西暦1557年に中国の澳門を占領して根拠地としてからは、ますますわが国に来る商船の数を増して、九州の諸大名としきりに貿易を営みましたが、彼等についてイスパニア人が来ました。

イスパニア人の世界一周

イスパニア人はコロンブスが新世界を発見してから、ノバ・イスパニア(今のメキシコ)を植民地として、盛んにその経営に従事していたが、コロンブスが亡くなってから13年後、西暦1519年に、ポルトガル人のマジェランがイスパニア王の命で、5艘の船を率いて大西洋を横断して、南アメリカの南端に在るマジェラン海峡を通して、はじめて太平洋に出て、それから98日の間、飲料水や食料の欠乏で非常に苦しみながら、ついに出帆した翌々年、西暦1521年に、今のフィリピン群島に着いた。

マジェランは不幸にもここで、幾人かの船長や水夫と共に土人に殺されたが、生き残った者たちの約半数だけは、僅かに残った1艘のビクトリア号で、更にインド洋を横断して、アフリカの南端をまわって、翌西暦1522年にイスパニアに帰った。実にこれが世界一周の始めでした。と同時にまた、この航海によって地球はたしかに円い物であるという事と、コロンブスが発見した新しい陸地は印度の一部ではなくて、全く別の大陸であるということが明らかに証拠立てられたのでした。

南蛮人と南蛮船

イスパニアは、この年から43年経った後、即ち西暦1565年にフィリピン群島を占領して、その6年後、西暦1571年に政庁をマニラに開いて東洋貿易の根拠地とした。それからというものは、イスパニア人もまたポルトガル人と共に、しだいに我が国にやって来て貿易を営んだ。そして、これらの船は皆南方から来たのですから、わが国では、これらの両国人を南蛮人といい、その船を南蛮船と呼びました。

そのころ、南蛮船が最も多く入って来たのは、肥前の松浦氏の領地の平戸でして、一時の平戸は外国貿易の中心地として大いに繁栄を極めたのですが、その後、大村氏の領地である長崎の港が開かれることになったので、その繁栄はしだいに長崎に奪われました。

ポルトガル語

第13話 西洋人の渡来

なお、今日、われわれがふだんに使っている言葉の中には、これらの南蛮人から借りてそのまま日本語に
してしまった単語が可なり多く入っています。例えば、羅紗(毛織物)、金巾(目の細かい薄地の綿布)、天鷲絨、
更紗(模様を染めた布)、メリヤス(伸縮するように編んだ布)、パン、カステラ、金米糖、煙草、南瓜、シャ
ボン、カルタ、金糸雀などの如きは、中でも特に著しいもので、これらは皆ポルトガル語です。

これを見ても、いかに当時のポルトガル人が、我が国人が名も知らない珍しい品物を沢山に日本に持っ
て来て、さかんに売り込んだかが窺われます。

(第13話 西洋人の渡来 終わり。 次は前頁に戻り、 第14話 キリスト教の伝来 へ)